

あいさつの言葉

和田 洋 一

竹中先生が亡くなられて、あれからもう一年近くになります。

竹中先生は一九五三年の春、参議員議員に立候補されるとともに、同志社大学文学部社会学科教授の地位を退かれました。

その直後、研究室にのこされたわれわれは、社会学科の弱体化を今さらのように感じさせられました。先生は社会学科研究室の中心であったことにまちがいありませんし、社会学科の産みの親、育ての親であったと言っても言いすぎではなかったでしょう。当時研究室一同の平均年齢が非常に若く、五十歳以上の者は竹中先生ひとりという事情もありました。もちろん学問の上で自他ともに許す実力があれば、二十代でも三十代でも、すこしもおそれることはないのですが、われわれは正直にひとひとり未熟であることを十分自覚していましたし、社会福祉学、社会学、新聞学などという新しい学問領域の中で、研究の方向を探し求めるにあたって、竹中先生がそばにいて下さることは、何といつても心丈夫なことでした。

私たちの同僚の中には、竹中先生が同志社をやめられるのは、まちがっていた、極力慰留すべきであったと考える人も出てきました。しかし結果として、先生はわずか数年のあいだに政治家として立派に成長され、今まで身につけてこられた学問教養を政治の上に十分生かしながら活躍をつづけられました。そして多忙な政治生活のかたわら、同志社の

大学院で社会福祉の講義をも、もってこられました。

先生がわれわれの研究室を去られてから、われわれひとりひとりが六年と何カ月、年をとったことは確かです。学問の上でも、いくらかの進歩はしただろうと思うのでありますが、それは『人文学』のこの号にかかげられた論文、あるいはほかで発表される業績をみて頂いて評価して頂くほかはありません。

先生の追悼号を企劃するにあたっては、社会学科全員が力作を発表することが当然望まれたのですが、やはりさまざまなかんじで故障が個々の人の上に出て、それは断念せねばなりません。しかし今回筆をとった者も、とらなかつた者も、この追悼号を出すにあたって、竹中先生の温容をあらたにおもい、学問の上での生前のご指導を感謝し、われわれ後輩の先生にたいする無礼のたがひをお詫びする気持ちにおいて一つであること、社会学科を立派にまもり育ててゆくことが、先生に恩返しをする道だと考えていることにおいても一つであることを申しそえて、あいさつの言葉といたします。

(一九五九・十二・二八)